

Title	ソーシャルワーク・アセスメントのプロセスが結果に反映されない要因
Author(s)	山口, 圭
Citation	聖学院大学論叢,21(3) : 307-320
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=912
Rights	

聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

ソーシャルワーク・アセスメントのプロセスが 結果に反映されない要因

山 口 圭

Factors not reflected in results of social work assessment

Kei YAMAGUCHI

By repeating analysis of deductive inference and inductive inference by turns, factors not reflected in the social work assessment were examined through a system of item checking.

Incongruities in social assessment became clear through the system of item checking by quantifying performance of social work assessment through qualitative investigation.

Key words: social work assessment, Home-Based Care Center, observation skill, investigation skill, qualitative study

1 はじめに

現在、公的介護保険制度における居宅介護支援は、保険で適用されるサービスをパッケージすることが中心となっているといわれている。しかし、利用者のなかには、介護保険制度の契約制度が想定しない者、すなわち、個々の程度は異なるが、単に介護保険制度に基づくサービスを提供するだけではなく、サービス以外の様々な支援を含めた総合的な支援が必要になる者も多い。

この総合的な支援を展開する機関として、2006年度介護保険制度改正までは、地域型在宅介護支援センター（以下、地域型）が位置づけられてきた。社会保険方式では扱いにくい高齢者・家族間の問題、あるいは、孤立した高齢者の問題等も対象に入れながら支援を展開することが求められていた。同時に、総合的な支援を一人ひとりの利用者に対して展開する前提には、「人間：環境」の視座から利用者に関する情報を収集し、これらを分析し、解釈する「ソーシャルワーク・アセスメント」が必要不可欠であった。

筆者は、こうした見通しに基づいて、在宅介護支援センター相談員を対象とした「在宅介護支援センターケアプラン作成検討会」に参加し、様々な相談員とかがわってきた。

相談員から語られることばを通して、多くの相談員が「アセスメントが適切に行われていない」

と感じていることがわかってきた。

そこで、本研究において、地域型のアセスメントが適切に行われていないのは、どのような要因によるものか整理していく。

なお、地域型におけるアセスメントに関する予備的な調査として、「検討会」参加者（ $n = 48$ ）に対する質問紙調査において、居宅介護支援におけるアセスメントが適切に行われているのかをたずねた。その結果、「行っていない」36名（75.0%）で、「行っている」10名（20.8%）を上回った。また、2名（4.2%）が無回答であった。

さらに、「行っていない」と回答した者について、その理由を選択肢でたずねたところ「時間的な余裕がないため」28名（58.3%）、「アセスメントを行うための知識や技術が不足しているため」10名（20.8%）、「アセスメントツールに不備が多いため」3名（6.3%）、「居宅サービス計画書のケアプランに活用できないため」9名（18.6%）、「その他」2名（4.2%）であった（複数回答であるため全体は100%を超える）。

2 研究方法

1) ソーシャルワーク・アセスメントの研究動向

日本におけるソーシャルワーク・アセスメント研究の動向は、大きく二つの流れに分けることができる。一方は、欧米の議論に関するものであり、もう一方が、アセスメントツールに関するものである。

前者は、Meyer などのアセスメントに関する文献を紹介し、考察を加えていくものである（例えば、中村、1998を参照）。これらの紹介されたものが、日本において、どのように展開することが可能であるかまでは、未だに十分な議論がなされていない。

後者は、さらに三つに分かれる。その一つが、介護保険導入を契機にソーシャルワークだけではなく、様々な領域でアセスメントツールが開発されたことによって、具体的に説明し、実践現場でどのように活用がなされるかを考察するものである。この中には、チェック項目を中心としたアセスメントツール（以下、「アセスメントツール」）に対する批判も多くなっている（例えば、松岡、2001を参照）。このアセスメントツールは、標準化されたチェックリストにしたがってアセスメントを行うものであり、代表的なものとして、MDS-HCや日本版成人・高齢者用アセスメントなどがある。

二つめは、様々なアセスメントツールの項目を比較し、それぞれの違いを検討したり、実際のケースにあてはめて、それぞれの利点と欠点を検討したりするものである（例えば、日本社会事業大学、1999を参照）。ただし、この種の研究は、分析者がどのような専門領域に属するかによって、比較対象となる事例の内容が異なるとともに、評価も大きく分かれている。

最後に、ソーシャルワークの固有性をさらに発揮させるためにアセスメントツールを開発したり、エコマップを図式化したりするものである（例えば、太田・黒田・溝淵，2001を参照）。ただし、これらの方法についての具体的なコンセンサスはできていないのが現状である。

2) 研究枠組み

Kemp らによれば、ソーシャルワーク・アセスメントとは、ソーシャルワーク「実践での意思決定を導くために、ケースの状況を組織的に理解する」ことである。ここでいう「ケースの状況の組織的な理解」とは、「関連する状況の特質」を包み込んだ「核となる課題」を理解することであり、しかも、「核となる課題」は、「人とそれに影響を与える環境のあいだの相互作用」を特定するものである（Kemp, Whittaker & Tracy, 1997 / 2000, p.95）。

また、ソーシャルワーク・アセスメントは、どのような実践領域であっても「人と環境についての考察に焦点を絞り、多次元で多様なシステムの視点」をもっている。

本研究では、Kemp らの指摘にしたがって、「人間：環境」についての考察に焦点を絞り、多次元で多様なシステムの視点をもつソーシャルワーク・アセスメントが、地域型のアセスメントに取り込まれていないのは、どのような要因によって規定されているのかを先行文献等と聞き取り調査から得られたデータとを照合せながら明らかにしていくことを目的とする。

3) 研究方法

本研究は、聞きとり調査を中心に進めた。調査対象者は、先の検討会に参加した地域型の相談員のうち、社会福祉士、介護福祉士に限定した。以下、両福祉士を示す場合を「ワーカー」とする。本研究では、介護福祉士が調査対象として含まれている。これは、佐藤豊道（2001, p.448）の見解にしたがっており、地域型の介護福祉士はケアワークを展開するよりも、主たる機能をソーシャルワークに置き、実践していることを考慮したからである。

2002年9月から11月にかけて Lofland らの『社会状況の分析』に示されたガイドにしたがって、理論的サンプリングを用い、ワーカーの10名に対して聞きとり調査を行った（Lofland & Lofland, 1995）。インタビューと並行して行われるデータの分析の進度に応じて、インタビュー・ガイドの項目の様式と順列は変更していった。対象者には、このインタビュー・ガイドにそって自由に回答してもらった。録音した音声を逐語録に起こすとともに、インタビュー記録の作成を行った。得られたデータについて、コーディングを行い、カテゴリー化していくことによって分析を進めた。

なお、地域型で行われるアセスメントは、居宅介護支援のみならず、実態把握、介護予防・生活支援、各種申請代行の際にも行われ幅が広いものであった。本研究では、介護保険制度の利用者に対するアセスメントに限定し分析を進めた。

3 分析結果

以下、ソーシャルワークにおける基本的技法（佐藤豊道，2001，p.274）を演繹的推論とし、また、聞きとり調査等によって得られたデータを帰納的推論とし、これらの分析を交互に繰り返すことによって、カテゴリー化し、先行する知見と照合せながら、考察を行った。

1) 観察技法とアセスメントツールとの乖離

観察とは、狭義には「直接的な視覚活動」を表すことが多いが、広義には「問題および問題を抱えた当事者に関する事実把握のための能動的な知覚活動の総体」（佐藤豊道，2001，p.274）をいう。

観察技法は、「人間：環境：時間：空間」の視座と、ワーカーの直観力によって、一つひとつケースに応じて、全体と部分を往復しながら焦点化される。ワーカーがそのケースにどのような意味づけをするかによって、視座は変化するものである。

「観察」の意味は、ソーシャルワークにおいても、狭義に理解されることが多い。しかし、ここでいう「観察」は、フィールドワークの技法における「観察」（箕浦，1999，p.22）に近い。次のような例がこれを表している。

例：「新人の（作成したアセスメントツール）を見たときに、私はそのケースの一つ一つについて、その職員と話し合いをしてですね。もちろん経験がないから見えないわけですよ。だから、本当に書類をつくるんじゃなくて。書類なんてどうでもいいから、本当にその人の必要としているところにターゲットを絞って、その職員がきちんと関われる、あるいはサービスを調整できるとか、そういうふうになってほしいなと思って。（中略）本当だったら、どういうふうに見ているのか、表面に見えるところと、見えないけど見なきゃいけないところ、そこらあたりをディスカッションしてあげれば良いんだけど。見えないところを見る努力をしてほしいといったんです。」

佐藤豊道が、「客観的事実に対する観察に加えて、主観的事実に対する観察は、問題および問題を抱えている利用者正しく把握するうえでも重要である」（2001，p.276）としている通り、「見えないところを見る努力」がワーカーには必要とされている。このような表現がしばしば出てくることが、視覚的に把握可能な観察を重視する他の専門職とは異なるところである。当然、見えないところを見る力は、経験を積み重ねるにしたがって、幅広く、深くなっていく。

次に、ソーシャルワーク・アセスメントにおいて、ワーカーが何を観察しているのか見てみる。援助開始期の観察は、利用者や家族の主訴を手がかりに開始されることが多い。

例：「まず主訴の確認ですね。その主訴について、要望をかなえるためにどういう調整が必要なのかを考えますよね。それで、そのためにいろいろと協力体制は、どういう協力体

制なのかということをしてすよね。ご家族の方の協力、事業所のサービス、それからそこで足りない場合は、(中略)社会資源が他に何か有効的に調整できるものはないんだろうか、ということですよ。一在宅介護支援センターだけではどうしようもないという場合は、ケースカンファレンスですよ。これは区のケースワーカー、福祉事務所のケースワーカーの方、あるいは、病院にかかられている方は、医療ケースワーカーなりにおいて、ケースカンファレンスをして問題解決を探っていくということですよ。」

サービス導入をすることによって、問題の解決をはかることのできるケースの場合、すぐにでもサービスの利用の開始を希望する利用者や家族も多い。利用可能な社会資源と関連づけながら、利用者や家族の観察を行っていく。このような暫定的なアセスメントであっても、観察対象である社会資源は、単に介護保険サービス内に限定されてはならず、様々な機関との連携を視野においている。また、暫定的なアセスメントを一度行い、モニタリングや再アセスメントを通して継続的に利用者の観察を行い、「人間：環境」の視座から、利用者や利用者の取り巻く環境を把握していく。

一方で、単一のサービス導入だけでは、問題の解決をはかることが難しい総合的な支援を行う場合、援助開始直後から利用者宅を訪問し、入念な観察が行われることもある。さらに、初期のアセスメントが終了しても、重点的に繰り返し訪問することによって、モニタリングと同時に再アセスメントを行い、「人間：環境」の視座から、利用者や利用者の取り巻く環境を徐々に把握していく。

利用者の自宅を重点的に継続的に訪問することによって、単に、問題点だけではなく、利用者の日常的な生活が把握されていく。X区ケアプラン作成検討会で取りあげた事例においても、アセスメントツールでは、問題点だらけの利用者像として記入されていたものが、実際、ワーカーによって利用者の生活が語られたとき、問題だけでなく、利用者のありのままの生活が浮かんでくることもあった。このような生活実態は、アセスメントツールには現れにくい。ワーカーが観察を行っている一つの表れとも考えられる。

アセスメントツールに表れない利用者の生活実態は、当然、他のサービス提供者側には伝わらないため、他のサービス提供者に直接伝えることもある。

例：「(他の)事業所さんの場合は必ず私が伺って、ケース紹介をしてきます。電話とか郵送だけだと結構情報として物足りないので、まず(他の事業所)訪問(すること)でやっています。」

アセスメントツールに表れない利用者の生活実態を記録化することができないため、ワーカーは口述によって、他の職員に伝えている。ワーカーのなかには、観察した内容が他の援助者に伝わらない難しさを感じている者もいる。

さらに、ワーカーがどのように観察を行っているのかをしてみる。

ワーカーは、利用者宅を訪れ、利用者や利用者を取り巻く環境について全体にわたる観察からアセスメントを始める。

ソーシャルワーク・アセスメントのプロセスが結果に反映されない要因

例：「(利用者宅に) 行ってみて、話せば、それだけで目からも耳からも、情報というのは入ってくるわけで。」

このような観察や、生活場面面接を手がかりに、仮説的な生活課題をつくり出していく。継続的な訪問を繰り返し、利用者の生活の文脈と、それぞれの生活課題という部分を行き来しながら、特定の部分の観察に焦点を絞り、利用者の生活の文脈に位置づけた生活課題を明らかにしていく。

ただし、全体の観察といっても利用者の生活すべてを観察するということは不可能である。ここでは、全体の文脈を理解すること、すなわち、利用者が位置づけられる生活状況の前後関係を表しており、ソーシャルワークでいわれるように「人間：環境」の視座から利用者を理解することである。また、文脈理解とは、利用者の意味を利用者の生活の文脈の中で理解しようとする態度のことをいう(小田・山本・春日ほか, 2002, p.391)。したがって、ワーカーにとってのソーシャルワーク・アセスメントは、「事象や対象を測定することのなかで埋没し見失われた対象を理解するという了解的スタンスでデータを見ていく」解釈的アプローチである(箕浦, 1999, p.22)。なお、ここでの「了解」とは、人間の行為の意味を解釈し、理解するということである。

全体と部分を往復しながら生活課題とこれを取り巻く状況が焦点化され、利用者の生活全体の文脈に沿った生活課題が明確化されるという特徴は、他職種が行なうアセスメントの結果との違いになって表れることもある。

例：「(特定疾病を患う要介護者)のケースに対応していると、職種の違いはありますよね。私、やっぱり家族全体で見ますよね。看護婦(師)さんや保健婦(師)さんは、やっぱり本人の病状主体に見るから、ご主人にもっと介護に入れとか、ご主人にキーパーソンになれというんですけど。私は、ご主人が(仕事から)帰ってこられるだけで良いと見ているんですね。(中略)毎日、家に帰ってきて。来てくださるだけでいいと思っていて。ましてや介護にご主人をいれようなんて、私は(思わ)ないけれども。でも、やっぱり見方が違えば、『なぜ家族がもっとやらないかやらないか』って言いますよね。だから、『それは、理想なんだけれども、やっぱり理想どおりには行かないし』という話をしなきゃいけないわけですよ。」

このケースにおいて、要介護者の介護ニーズを充足することだけに観察の視点を絞れば、看護師らが主張するように「夫」を主たる介護者にすることが望ましいかもしれない。しかし、利用者の生活全体の文脈を把握するため、取り巻く環境の一つである家族の状況を把握しているワーカーにとってみれば、家族の状況に関する情報収集を行い、それを考慮にいれ、要介護者にとって必要な支援がどのように調整されなければならないかを分析するのである。

このようなワーカーの観察対象の広さや、観察技術のメカニズムに対して、チェック項目方式によるアセスメントツールは、網羅的な情報を「細分化され機能化された項目」(若松, 1996, p.68)によって捉えようとする。

これらは、「観察者の諸条件（身体的・精神的健康・教育程度・観察動機や目的、観察者の位置など）」（佐藤豊道, 2001, p.276）が、観察の影響を及ぼすという観察の限界を克服する利点をもつ。

例：「たとえば、自分の問題の見方が不安なときとか、まったくの新人で何を問題としてわからないとか、そういう場合には、全般にわたって、一般的な質問をして、そこから問題を拾っていく方法も確かに良いんだと思うんです。それと、問題が見えないときに、そういう項目に従ってですね、一つ一つ丁寧に聞いていって、問題を探していく方法に使うとか、（中略）そういうことであれば、良いんだけども。」

客観的なアセスメントを行うために、援助者の経験的な技法を排除することも必要である。一方において、調査に応じたワーカーも、チェック項目方式によるアセスメントツールの意義を認めながら、「良いんだけども」と懐疑的な意見をもっている。

「細分化され機能化された項目」について網羅的に情報を収集することは、確かに観察するポイントを一定にする。しかし、ワーカーは、全体像をつかむ観察や面接を行うなかで、仮説的な問いを立て、全体と部分の往復のなかから、一人ひとりの利用者に応じて観察の焦点を絞る技法を用いる。ワーカーは、このような技法を無視し、平面的に捉えしまうツールに対して抵抗感をもっている。

例：「いくら一般的なアセスメントをしたとしても、やっぱりケースの独自性もあるわけですし、個別性もあるわけですし、事情もあるわけですし、流れもあるわけですし。だから、そのとき、そのときの同じ現象であっても、当然対応も違えば、問題意識も違うわけだから、それは、そこらあたりを察知したり感じたり、意識づけたりするのがこの仕事の専門性じゃないかと私は思っているんですね。」

一般的で網羅的な情報を把握する必要があることから、アセスメントツールでは、おおよその利用者にあてはまるようにするために、調査項目は普遍的である。また、項目は、細分化され、機能化されているため相互の関連性を失っている。利用者の生活全体の文脈のなかで、情報を理解することができなくなっている。全体的な視点から仮説的な問いを立て、全体と部分の行き来しながら焦点を絞るワーカーの観察技法を排除し、情報を平板化してしまうため、ワーカーは、チェック項目方式によるアセスメントツールに違和感をもっている。

このようにワーカーの観察は、一人ひとりの利用者によって、また、そのケースに対してワーカーがどのような意味付与するかによって、観察対象が異なる。一般化、普遍化することが難しくなっているため、チェック項目方式によるアセスメントツールに違和感を覚えながらも、新たな方法を打ち出すことができない。

2) 調査技法とアセスメントツールとの乖離

調査技法とは、『人間：環境：時間：空間』に関わる情報を収集し、実態を把握し、ニーズを明

らかにし、利用者の意思を確認したうえで、適切な社会資源を充当し、利用者のクオリティ・オブ・ライフを高めることに貢献する」(佐藤豊道, 2001, p.277) ことをいい、ソーシャルワーク・アセスメントで用いられる中心的な技術がここに含まれる。

ワーカーは、観察や面接によって情報収集を行う。利用者が抱える問題に関する情報収集を行うことはいうまでもないが、生活課題の要因は単一に生起しているというよりも複数の要因が複雑に絡み合っていることのほうが多い。したがって、課題の状況を把握するために、全体と部分を往復しながら、しだいに情報収集の焦点化がなされる。

同時に、雑多な情報のなかから、生活課題に関連する事項を選択し、分析を行う。どの情報を選択し、分析するかは、それぞれのケースのもつ個別的な状況に応じて視座が変化するため、項目の標準化を図ることが難しい。こうした情報の焦点化を行い、分析するなかで、利用者の生活全体の文脈に位置づけられた生活課題が抽出される。

例：「面接の会話のなかで、問題の抽出ができますので、問題が浮かび上がってきたところで、やっぱり背景を探るといふか。考察できる部分について、質問を絞り込んでいくとか、聞きだすようにしていくとか、意図的に質問していくとか、探りを入れていくとか、そういうようななかかわりで、大体の形というものを作ります。」

利用者を訪問することによって、ワーカーは、全般的な観察を行いながら、利用者や家族から主訴を聴く。そのなかで、全体像を浮かびあがらせ、利用者や家族への面接を進める。客観的な情報だけではなく主観的な情報を収集し、徐々に焦点を絞りこむ。複雑に絡み合っている要因を明らかにし、生活課題を抽出する。複数の生活課題がある場合は、その関連を考えながら、援助を組み立てていく。一連の過程は、直線的には進むものではなく、らせん状に進む。

この一連の過程は、「人間の営みのコンテキストをなるべく壊さないような手続きで研究する方法」(箕浦, 1999, p.4) であるフィールドワークで行われている調査過程に沿っている。

Loflandらは、質的なフィールド研究におけるデータ(情報)収集、データの焦点化、データの分析を示している。収集と焦点化は、「二つの主要なインプット活動」であり、「収集されたデータは経験的インプットを提供するものであり、焦点を絞った質問を発することによって社会科学的情報が提供される」としている。また、データの分析は、「収集され焦点化されたデータ間の相互作用の総合」として現れてくる。「データの収集と焦点化は初期においてなされる相互に関連した活動であり、それが終期において分析という主要な活動として現れてくる」と述べている(Lofland & Lofland, 1995 / 1997, p.2)。

ワーカーは、アセスメントにおいて、情報を収集し、そのなかで直接的に必要な情報、間接的に必要な情報、現在はあまり必要のない情報等の整理を行っていく。蓄積された情報は、分類され、関連づけられ、構造化され、必要があれば、再び情報が収集され、分析が進んでいく。

例：「それ(情報)をやっぱり自分の中で整理して、組み立て、絞っていくか。当然、優先

順位とかもつけていくわけですから。で、スゴク大きな問題であっても、今は、かわらないことも当然出てきますし。」

ワーカーは、情報と情報を関連づけ構造化し、自らの援助方針を組み立てて、利用者の援助計画を作りだしている。情報を構造化していく分析方法も、データに根ざした理論を開発する質的なフィールド研究に沿ったものである。なお、佐藤豊道も、ワーカーの調査技法において、質的研究の方法を高めることを指摘している（佐藤豊道, 2001, p.278）。

しかし、ワーカーは、質的な調査技法を体系的に学んでいるわけではなく、経験的にこの技法を身につけている。しかも、このような過程が、ワーカーの意識のなかに明確に位置づけられているわけでもない。ワーカーは分析過程を言語化できていないとともに、ソーシャルワーク・アセスメントの重要な位置づけであることを意識化できていない。

ワーカーは、分析過程を自らの思考のなかで、自然に行うことによって、チェック項目方式によるアセスメントツールに違和感をもつことが多く、チェック項目方式のアセスメント結果と組み込んだり、形式的にチェック項目方式のアセスメントを行ったりしてケアプランを作っている。個人的な「技」であるため、このような行為は、表面には浮かんでこない。

(1) チェック項目方式のアセスメントツールの網からこぼれる情報

では、何故、ワーカーはチェック項目方式のアセスメント結果に違和感をもつのだろうか。

アセスメントにおいて、ワーカーは、一般的に、他職種に比べ医学知識が不足していることが多い。チェック項目方式によるアセスメントツールを用いることによって、知識不足を補うことができる。また、項目化しやすいADLについても客観的な把握が行いやすい。

例：「客観的に問題点が出てくるので、そういったところは、とてもいいと思うんです。で、いろんな問題が、わりと身体的なね、病気の面だとか、医療そうね、医療ケアだとか絡んでる人は、アセスメントはともしやすい方式だと思うんですけれども。」

例：「細かい病名とか、精神的な面とか、痴呆のところの部分とかすごく良く出てくるので、とりやすいんですが。私なんか考えるよりもとっても。」

アセスメントツールの一つであるMDS-HCについて藤園は「利用者の健康やADL等の『機能』に問題に焦点を合わせ」ることにその特徴を見出しているが（藤園, 2002, p.74）、実際、ワーカーもこれを利点として捉えている。

アセスメントツールは、客観的に把握できる事象がチェック項目方式の項目に並んでいることが特徴である。これらは、統計的処理が可能である定量的な調査項目である。

したがって、定量的な調査項目では、情報収集や分析が困難な場合もある。その一つが「利用者の思い」である。

例：「例えば、この方の場合、外出がそういう意思ですよ、本人が希望として、外出したいっ

ソーシャルワーク・アセスメントのプロセスが結果に反映されない要因

ていうところがあるかと思うんですが。そういったところもこういう問題領域（MDS－HCに含まれるCAPs）のところで、逆に問題じゃなくて、希望ってところは削られて（しまう）。（中略）MDSでは、その人の望む方向とか、そういったものは出にくいですよね。」

アセスメントツールでは、客観的な生活課題は抽出されるものの、そのなかで本人の主体的な希望が削られてしまう。主体的問題解決者は利用者であり、この主体性を排除し、生活課題を一方的に規定してしまうチェック項目方式によるアセスメントツールに対して、「利用者主体」を実践の価値に据えるワーカーは、違和感をもつ。

また、「利用者の思い」を尊重することは、抽象的に言い換えれば、ワーカーが、利用者を「個別的な『意味の世界』を主体的に生きる自律的存在者として」（佐藤豊道，2001，p.167）捉えることを尊重することである。このような観点から利用者の意味の世界に近づこうとする。

例：「ご自分は病気がながらも、ヘルパーさんを使ってでも、主婦と言う仕事を果たしているということが存在の意味なわけですよ。母親としてとか。妻としてとか。でも、そうすることによって、その人は、大変な病気になってしまった自分を辛うじて抑えて生活をしているわけじゃないですか。」

ワーカーは、このケースにおいて、「主婦と言う仕事を果たしているということが存在」ということを本人の側に立って理解し、利用者にとってこの存在の意味づけこそが「病気になってしまった自分を辛うじて抑えて生活している」力を生み出していることを把握している。このような利用者の「生活世界」を理解することがこのケースの援助を組み立てるうえでの鍵となっている。

アセスメントツールには、利用者の「生活世界」を尊重しながら支援を行うワーカーの視点が反映されない。また、これらの情報は、定量的な調査では把握が困難であり、定性的な調査によって把握可能なものである。

アセスメントツールは、包括的に網羅的とされているが、ケースの持つ個性に応じて、綿密なアセスメントを行おうとすると情報が収集できない。さらに、客観的に把握できる事象が項目となっており、実際には、網羅的とされている項目から通りぬけてしまう情報が多い。これらの情報は定性的であり、質的な調査によって浮かびあがってくるものであり、ここでもワーカーのソーシャルワーク・アセスメントにおいて質的調査技法が求められている。

(2) チェック項目方式のアセスメントツールの範囲の限定性

チェック項目方式のアセスメントツールには、利用者を取り巻く環境に関する情報について項目が立てられているものの、収集された情報のなかには、チェック項目方式の項目に落とせないこともある。

例：「家庭、居住環境だとか、あと、その家事支援的な、そういう生活支援のような視点から、

(MDS-HCで) アセスメントしたときは、やりにくいです。]

例：「家事援助面っていうんでしょうかね、家事援助の部分で。家族との関係で本来だったら必要なだけけど。(ワーカーの) 思うところが出てこなかったりとか、そういう感じですかね、多分、ADL的な部分はかなり出てきていると思うんですけども。MDS(-HC) だと。」

利用者を取り巻く環境は一定ではないため、標準化しづらく、項目にすることができないものが多い。家事は、その家族独特の方法がとられていることが多く、標準化された項目では対応できない。

また、アセスメントツールでは、要介護者の状況について項目があげられているものの、実際に、ワーカーは、主たる介護者以外の家族員を含め、支援にあたることもある。

例：「(要介護者である) お父さんもお母さんも痴呆なんだけれども、一番の問題は次女のことなんですよ。まったく外に出られない。(中略)これはソーシャルワーカーじゃなければ、(中略)お父さんとお母さんの(アセスメントを含めた)認定調査をして帰ってくるんでしょうけれども。私の見方でいけば、とにかくそこのお父さんとお母さんより娘さん(次女)のほうがすよね。それと健常者の娘さんにどれだけ負担がかかっているかということで。そこが崩れれば、家族も崩壊しますし。そういうことがありますので、やっぱり娘さん(次女)と面接の時間をとって話を。どう思っているのか(伺った)。」

例：「同居の(息子)さんが、精神的にやっぱり不安的で、まあ、定職にもついてないし、アルバイトやってるまま、長続きしないですね。そういったところの、なんてのかな、虐待といつていいのかわからないんだけど、その怪我が出ない程度に蹴っ飛ばしたり、言葉の暴力があるんですね。で、そこら辺は、なんかもうちょっと、(MDS-HCでは) 細かくひろえない、という問題はありますよね。」

ワーカーにとって、家族に関する情報収集は、必要に応じて、主たる介護者に限定されず、同居する家族にまで及ぶこともある。同居する家族の状況が問題を一層複雑化させることが多いからである。具体的な支援は、他の専門機関に送致することが多いが、同居する家族の状況に焦点をあてて、ソーシャルワーク・アセスメントを行い、生活課題を解決することもある。

総合的な支援を行う地域型の意義を重視しているワーカーにとってみれば、必要に応じて、居宅介護支援事業の範囲を超えて支援対象にすることがあり、居宅介護支援事業を想定して作成されたアセスメントツールでは、アセスメントの範囲が限られてしまっている。

(3) 排除される生活全体の文脈

アセスメントツールでは、全体と部分を往復しながら焦点化する作業がないため、生活の全体の文脈のなかで生活課題を把握することが難しい。

ソーシャルワーク・アセスメントのプロセスが結果に反映されない要因

例：「(新人がMDS-HCを用いた) アセスメントをして、書いて、見てくれと言われたから見たんですけど。そこに出てくるのは、とにかく褥瘡をつくらないようにしましょうとか、食事をちゃんと食べさせましょうとか、そういうようなことしか出てこなくて。私とそのケースをずっと見てましたから。私にとっての一番のその方の問題は、とにかく介護者がいないということで。介護者がいないというなかで、どうやって介護者が安心して、外で働けるための援助をするかということ。」

おおよその利用者に当てはまるように作成された定量的な調査項目は、一般的になってしまい、それぞれのケースの持つ個別性や独自性を排除してしまう。しかも標準化された情報の分析によって、断片的な生活課題は浮かんでくるものの、個々のケースの持つ文脈、ここでは「どうやって介護者が安心して、外で働けるための援助をするか」という全体的な文脈のなかで位置づけられた生活課題が浮かんでこない。

以上のことからワーカーは、定量的なアセスメントツールに違和感をもっており、意識化はされていないものの質的調査の技法に沿って調査を行っている。

4 結 論

観察技法・調査技法というソーシャルワークにおける基本的技法の枠組みを演繹的にあてはめながら、調査によって得られたデータを帰納的に分析し、演繹的推論と帰納的推論を繰り返した。そのうえで、分析結果を既存の知見と照合させ、考察を行い、チェック項目方式によるアセスメントツールにソーシャルワーク・アセスメントのプロセスが反映されない要因を検討してきた。

本分析結果において、ワーカーは、経験的に定性的な調査に沿ったソーシャルワーク・アセスメントを行っていることが明らかになった。これは、「質的調査方法は、アセスメント過程の改善にも大いに寄与できるであろう」としたMilnerらの見通しにそったものであった(Milner & O'Byrne, 1998 / 2001, p.35)。そのうえで、ワーカーは、定量的手法を用いたチェック項目方式によるアセスメントに漠然とした違和感をもっていることも明らかになった。

おわりに

本稿は、拙著『ソーシャルワーク・アセスメントを規定する要因 ―地域型在宅介護支援センターの相談員への調査から―』の一部を用い、改めて分析し、概念化を図ったものである。2006年度の介護保険制度改正により在宅介護支援センターのほとんどは、新設された地域包括支援センターに移行し、地域型の位置づけとは異なりが出ている。そもそも本研究は、限られたデータからの限定的な分析にとどまるため、一般化することができないという限界がある。今後、地域型包括支援セ

ンターのワーカーに対して調査を行うことによって、比較検討を行い、一般化を進めていきたい。

最後になりましたが、調査にご協力をいただいた相談員の皆様、X区のY総合福祉事務所の職員の皆様に深く感謝いたします。

引用・参考文献

- Emerson, Robert M., Fretz, Rachel I. & Shaw, Linda L. *Writing ethnographic fieldnotes*, University of Chicago Press 1995 (エマーソン, R. M. ・フレッツ, R. I. ショウ, L. L. (佐藤郁哉・好井裕明・山田富秋訳)『方法としてのフィールドノート —現地取材から物語作成まで』新曜社 1998.
- 藤林慶子「高齢者ケアプランにおけるアセスメント」『ソーシャルワーク研究』20 (4) 1995 pp.37-44.
- 藤園秀信「介護支援サービスにおけるニーズ・アセスメントの枠組み試論」『中部学院大学・中部学院大学短期大学部研究紀要』No.3 2002 pp.69-78.
- Germain, C. B. & Gitterman, A. *The life model of social work practice : advances in theory & practice - 2nd ed.*, Columbia University Press 1996.
- Glaser, Barney G. & Strauss, A. L. *The discovery of grounded theory : strategies for qualitative research*, Aldine 1967. (グレイザー, B. G. ・ ストラウス, A. L. (後藤隆・大出春江・水野節夫訳)『データ対話型理論の発見 —調査からいかに理論をうみだすか』新曜社 1996.)
- Hepworth, Dean H., Rooney, Ronald H. & Larsen, Jo Ann. *Direct social work practice : theory and skills - 6th ed.*, Brooks / Cole 2002.
- 岩間伸之「ソーシャルワークにおける質的評価法としての事例研究」『大阪市立大学生生活科学部紀要』No.47 1999 pp.191-202.
- 岩間伸之「ソーシャルワークにおけるアセスメント技法としての面接」『ソーシャルワーク研究』26 (4) 2001 pp.11-16.
- Kemp, Susan P., Whittaker, James K. & Tracy, Elizabeth M. *Person-environment practice : the social ecology of interpersonal helping*, Aldine de Gruyter 1997. (ケンプ, S. P. ・ ウィンタカー, J. K. ・ トレーシー, E. M. (横山譲・北島英治・久保美紀・湯浅典人・石河久美子訳)『人一環境のソーシャルワーク実践 —対人援助の社会生態学』川島書店 2000.)
- 厚生福祉編集部「ケアプラン作成のためのアセスメント方式の例① (5月 厚生省高齢者ケアサービス体制整備検討委)」『厚生福祉』45 (75) 1997 pp.6-9.
- 窪田暁子「食事状況に関するアセスメント面接の生まれるまで —実態把握と理解の臨床的面接」『生活問題研究』vol.3 1991 pp.55-80.
- Lofland, John & Lofland, Lyn H. *Analyzing social settings : a guide to qualitative observation and analysis - 3rd ed.*, Wadsworth 1995. (ロフランド, J. ・ ロフランド, L. (進藤雄三, 宝月誠訳)『社会状況の分析 —質的観察と分析の方法』恒星社厚生閣 1997.)
- 松岡敦子「アセスメントにおける技法とツールの意味」『ソーシャルワーク研究』26 (4) 2001 pp.4-10.
- Milner, Judith. & O'Byrne, Patrick. *Assessment in social work*, Macmillan 1998. (ミルナー, J. ・ オルバーン, P. (杉本敏夫・津田耕一監訳)『ソーシャルワーク・アセスメント—利用者の理解と問題の把握』ミネルヴァ書房 2001.)
- 箕浦康子『フィールドワークの技法と実際 —マイクロ・エスノグラフィ入門』ミネルヴァ書房 1999.
- 中村佐織『ソーシャルワーク援助過程におけるアセスメントの展開と方法』大阪府立大学大学院社会福祉学研究科博士学位論文 1998.
- 日本社会事業大学『高齢者ケアマネジメント手法の総合的評価に関する調査研究 (平成10年度老人保健

ソーシャルワーク・アセスメントのプロセスが結果に反映されない要因

- 健康増進等事業による研究報告書』 1999.
- 新津ふみ子「MDS方式を使ったケアプラン作成の実際」『介護福祉』No.37 2000 pp.11-52.
- 小田博志・山本則子・春日常ほか「質的研究用語集」『質的研究入門 —「人間の科学」のための方法論』春秋社 2002. (Flick, Uwe *An introduction to qualitative research - 2nd ed.*, SAGE 2002.)
- 太田義弘・黒田隆之・溝渕淳「支援ツールの意義と方法」『ソーシャルワーク研究』26(4) 2001 pp.17-26.
- 佐藤郁哉『フィールドワーク —書を持って街へ出よう』新曜社 1992.
- 佐藤郁哉『フィールドワークの技法 —問いを育てる, 仮説をきたえる』新曜社 2002.
- 佐藤豊道『ジェネラリスト・ソーシャルワーク研究』川島書店 2001.
- 佐藤豊道「口述の生活史研究法」『ソーシャルワーク研究』27(4) 2002 pp.35-40.
- 寫末憲子・小嶋章吾「ケアマネジメントにおけるアセスメントツールの比較検討 —ケアワークの視点から」『介護福祉学』5(1) 2000 pp.58-72.
- 竹内孝仁『ケアマネジャー —アセスメントとケアパッケージの組み方』医歯薬出版 1997.
- 内田恵美子「日本版成人・高齢者用アセスメントとケアプラン(財団方式)」『介護福祉』No.38 2000 pp.41-92.
- 山口圭『ソーシャルワーク・アセスメントを規定する要因 —地域型在宅介護支援センターの相談員への調査から』東洋大学大学院社会学研究科社会福祉学専攻修士論文 2003.
- 若松利昭「援助システムの人間化」川田誉音・大野勇夫・牧野忠康ほか編『社会福祉援助方法論』みらい 1996 pp.62-76.